

極楽浄土における諸相と共生に関する研究Ⅲ

―極楽浄土の音声と菩薩の関係―

袖山榮輝

はじめに　　研究の経緯

本研究に関し、これまでに筆者は本誌において「研究Ⅰ」「研究Ⅱ」二本の論文を発表してきた¹⁾。極楽浄土の様相については二本とも主に康僧鎧訳とされる『無量寿経』の所説に依ることとし、研究Ⅰにおいては極楽浄土に存在する者について考察し、次いで研究Ⅱにおいては極楽浄土と他仏国土の関係について考察した。

『無量寿経』は無量寿仏（すなわち阿弥陀仏）の本願と、その本願成就により建立された仏国土（すなわち極楽浄土）の様相等を説示する経典である。無量寿仏は、菩薩であった修行時代において、自身がいかなる仏となるのか、いかなる仏国土を建立するのか、そこに存在する者について、どのような特徴、能力を具えさせるか、他の世界との関係をどうするのかという点について四十八通りの理想を掲げ、その実現を願って修行の完成を誓った。すなわち四十八の本願である。そのうち極楽浄土に存在する者については菩薩・声聞・天・人の四者が想定されるが、人天のための誓願内容が、実際には菩薩において成就するといった説示が見出された。誓願の枠組みを超えてなお誓願の成就がしているの

ある。これを経説の不整合と見るべきか否か考察を進めたところ、じつはそれは不整合ではなく、『無量寿経』においては極楽に存在する者はみな菩薩であるとの前提があり、浄土教学ではすでに、経文中に菩薩・声聞・天・人といった名称の相異があるのは極楽に往生以前のもとの世界での生存形態にしたがって呼称しているためとの解釈が示されていた。つまりは四十八願中、極楽の「人天」に関する誓願であつても「菩薩」において適応されるのである。

研究Ⅰにおいて筆者は第五宿命智通願と第八他心智通願に着目し、「往生以前に人天であつた菩薩は極楽浄土において、遙か遠い過去世の出来事を悉く記憶する。自分のことであれ、何処かの誰かのことであれ、善悪、是非にかかわらず過去世のすべてを認識するのである。そればかりか他心智通願の成就によって、極楽浄土に存在する者同士、互いの過去をみなで共有するという形が生み出される」のであり、さらに「他心智通はいかなる仏国土であれ、そこに存在する衆生の心をも知るのである。その者の過去を知り、他の六通を以てその者の姿、未来を知り、その者の声を聞くのである。そしてそれらの情報は、極楽浄土の菩薩たちにおいて共有され」「菩薩が共同して利他の活動をおこすこともあるだろう」との共生に関する所見を示した。

研究Ⅱにおいては、第三十一国土清浄願と第四十見諸仏土願に着目し、極楽浄土の菩薩は他の仏国土をいかにして知見するの点について考察した。国土清浄願の成就により極楽浄土は他の仏国土をその内部に映し出すことを可能とする。では何故に国土清浄願が誓われたのかといえば、極楽浄土の菩薩たちに他の仏国土を知見させるためであり、そのために見諸仏土願が誓われているとの所見を示した。

見諸仏土願では、国中の菩薩について「意に随つて十方無量厳浄の仏土を見んと欲せば」との条件設定を施し、また国土清浄願の註釈に、「大悲心」あるいは「上求心」を発すにつれ「穢土」や他の「浄土」を知見して「下化心」を起し、あるいは仏果を求めるとあることから、菩薩の「そうした心境の先に、穢土との共生、他の仏土との共生が予想さ

れる」との所見を示した。

研究Ⅰにおいては極楽浄土に存在する者、すなわち菩薩に具わるどころの自国の者同士、あるいは他仏国土の者との「共生」を可能とする能力について論じ、研究Ⅱにおいてはそうした菩薩の能力を展開させる極楽浄土の様相についてその一例を論じてきた。研究Ⅲと位置付ける本稿においては、極楽浄土の様相と菩薩の関係に言及し、菩薩と無量寿仏の「共生」について論じていきたい。

なお本稿の論考においては従来どおり、いわゆる康僧鎧訳『無量寿経』の説示に依拠し、使用するテキストは『浄土宗聖典』第一巻収載の書き下し文としたい。論考の手順としては、まずは四十八願中、国中、すなわち極楽浄土の菩薩に関する誓願を概観し、次いで菩薩と極楽浄土の様相の関係のうち、とりわけ「音声」との関係を確認する。その上で無量寿仏と菩薩がいかに「共生」しているのかを論じることとする。

また本稿において考察する文献の引用箇所は、拙論「極楽の風をめぐる考察」(平等院『鳳翔学叢』一三、二〇一七)におけるそれと一部重なっているが、異なる視点のなかで論考が深まるものと考えている。

一、国中菩薩に関する誓願について

『無量寿経』(以下、本経)所説の四十八願中、国中の菩薩に関する誓願は、第二十三供養諸仏願、第二十四供具如意願、第二十五説一切智願、第二十六那羅延身願、第二十八見道場樹願、第二十九得弁才智願、第三十智弁無窮願、第四十見諸仏土願、第四十六随意聞法願、計九願である。まずは願文の一つ一つについて『浄土宗聖典』の書き下し文²を提示し、その内容を概観してみたい。なお願名は後世の命名によるが、便宜上、小見出しとして一々の願文に付するものとする。

【第二十三供養諸仏願】

もし我れ佛を得たらんに、国中の菩薩、佛の神力を承けて、諸佛を供養せんに、一食の頃あいたに、徧く無數無量那由他の諸佛の国に至ること能わずんば、正覚を取らじ。

【第二十四供具如意願】

もし我れ佛を得たらんに、国中の菩薩、諸佛の前に在つて、その徳本を現ぜんに、諸もろの欲求よくする所の供養の具、もし意のごとくならずんば、正覚を取らじ。

【第二十五説一切智願】

もし我れ佛を得たらんに、国中の菩薩、一切智を演説すること能わずんば、正覚を取らじ。

【第二十六那羅延身願】

もし我れ佛を得たらんに、国中の菩薩、金剛那羅延身を得ずんば、正覚を取らじ。

【第二十八見道場樹願】

もし我れ佛を得たらんに、国中の菩薩乃至少功德の者、その道場樹の無量の光色あつて、高さ四百万里なるを見すること能わずんば、正覚を取らじ。

【第二十九得弁才智願】

もし我れ佛を得たらんに、国中の菩薩、もし経法を受読し、諷誦持説して、弁才智慧を得ずんば、正覚を取らじ。

【第三十智弁無窮願】

もし我れ佛を得たらんに、国中の菩薩、智慧辯才、もし限量すべくんば、正覚を取らじ。

【第四十見諸仏土願】

もし我れ佛を得たらんに、国中の菩薩、意こころに随つて十方無量嚴淨の佛土を見んと欲せば、時に応じて願のごとく、宝樹の中において、皆悉く照見せんこと、なおし明鏡をもつて、その面像を觀るがごとくならん、もししからずんば、正覺を取らじ。

【第四十六随意聞法願】

もし我れ佛を得たらんに、国中の菩薩、その志願に随つて、聞かんと欲する所の法、自然に聞くことを得ん。もししからずんば正覺を取らじ。

国中の菩薩、すなわち極樂淨土の菩薩に関する計九願のうち、まずは第二十三願から第二十六願まで計四願が連続して示されている。すなわち、菩薩については、まず諸仏供養のためにごく短い時間の間に他の仏国土へと赴き（第二十三供養諸仏願）、その供養の品についてはこれぞと思うものを意のままに現出することができるように（第二十四供具如意願）と誓われている。ちなみに菩薩による諸仏供養について註釈は、諸仏の説法を求めるためである³と、その理由を言及する。極樂淨土の菩薩は諸仏の教えを求めるべきである⁴と、無量寿仏はそのような認識を抱いているのである。では何故に菩薩は教えを求めるべきなのか。願文の配列順から推察するならば、「一切智」を「演説」できるようにするため（第二十五説一切智願）と考えるのが妥当だろう。なお、この場合、演説の対象が想定されていると理解すべきである。

菩薩に一切智を演説させようとする第二十五願について、註釈は続く第二十六金剛那羅延願と一對の誓願であるとの認識を示している。「那羅延」を「天上力士也」「其力量象等七力」と註釈したうえで、「若無身力難持智力故有此願」と述べ、身体に力がなければ智力を發揮することができないのであるからこの願があるとする⁴。一切智は金剛那羅延が如き力強い身体があつてはじめて有効性を帯びるといっているのである。そうしてみると第二十五願の「演説」は言葉で説き明かすだけではない、身体による何らかの行為をも含意しよう。

さて第二十三願から第二十六願は菩薩のいわばスペックに関する誓願であったが、第二十八見道場樹願における誓願のテーマは菩薩と極楽の様相との関係に移行する。すなわち菩薩が極楽の道場樹の全容を仰ぎ見ることができるようにと無量寿仏は願うのである。それにしても菩薩が道場樹を知見することにどのような意味があるのか。無量寿仏はなぜここで誓願のテーマを移行させるのか。第二十九願と第三十願が再び菩薩のスペックに関する誓願の戻っていることを鑑みると、その点が気になるところである。これについては後述することとする。

菩薩のスペックに関する誓願と位置付けることのできる第二十九願について、浄土宗総合研究所編『現代語訳浄土三部経』を参照するならば、極楽の菩薩は無量寿仏自身の教えを聴いて復唱し、さらに暗唱し、それを理解し解説するに頭脳明晰にして弁舌軽やかであるようにしよう誓われている。続く第三十願ではさらにその能力に限界がないようにしよう誓われていて、第三十願は第二十九願を究極の状態まで引き上げることと目的とする誓願と位置付けられよう。第四十願はすでに研究Ⅱにおいて論じてきた。極楽の菩薩について極楽の宝樹の中に映し出される他仏国土を觀察できるようにするというこの願が、第三十一国土清浄願と一对の関係をなし、極楽に存在する者に遙か遠くを見通す能力を授けるといふ第六天眼智通願成就の、その具体的な様相を与えていることは研究Ⅱから導き出されるところである。この第四十願は第二十八願同様、菩薩と極楽の様相との関連に言及する誓願と位置付けることができ、そうした点から、第二十八願についても菩薩のスペックと道場樹との関係が注目されるのである。

第四十六願は、極楽において菩薩が聞きたい教えをおのずと聞くことができるようにと誓うものである。前に第二十三供養諸仏願の目的として菩薩が諸仏の教えを求めるとの解釈を紹介したが、極楽においては菩薩が無条件に説法を聞くことができるようにと無量寿仏は誓っているのである。

以上、四十八願中、極楽の菩薩に関する誓願を概観してみると、無量寿仏は極楽の菩薩が仏の教えを聞き、会得し、

その教えを誰かある者に説き明かし、さらには誰かある者に対して実践する、そうした能力が具わるようにと誓っていることがうかがい知れよう。

二、道場樹をめぐる考察

極楽浄土の様相と菩薩に関連する誓願としては、前述のごとく第二十八見道場樹願と第四十見諸仏土願を挙げることができる。このうち見諸仏土願については研究Ⅱにおいて考察した。本項では見道場樹願がどのように成就しているのか考察してみたい。

道場樹はいわゆる菩提樹に相当する。菩提樹については、釈尊が樹の下で精神統一を深めるなか覺りを開いたところから、覺り（菩提）を開いたその場所に聳えるメモリアルな樹を想起するが、本経は道場樹について次のように描写する。

①無量寿佛の、その道場樹は、高さ四百万里なり。その本、周圍、五十由旬なり。枝葉、四もに布けること、二十万里なり。一切衆宝、自然に合成せり。月光摩尼、持海輪宝を衆宝の王たるをもつて、これを莊嚴せり。條の間に周帛して、宝瓔珞を垂れたり。百千万の色、種種に異変す。無量の光焰、照耀すること極まりなし。珍妙の宝網、その上に羅覆せり。一切の莊嚴、よろしきに随つて現ず⁶。

道場樹の高さは第二十八願に対応する「四百万里」であり、また「無量の光色」についても種々の宝玉がその光源となつている様相が表現されている。さらに後続の經文を見てみる。

②微風、徐く動いて諸もろの枝葉を吹くに、無量の妙法の音声を演出す。その声、流布して、諸佛の国に徧す。その音を聞く者は深法忍を得て、不退転に住す。佛道を成ずるに至るまで、耳根清徹にして苦患に遭わず。目にその色

を觀、耳にその音を聞き、鼻にその香を知り、舌にその味わいを嘗め、身の光を触れ、心に法をもつて縁するに、一切皆甚深法忍を得て、不退転に住す。佛道を成ずるに至るまで、六根清徹にして諸もろの悩患なし⁷。

極楽浄土においては微風が徐(ゆる)くそよいで道場樹の枝葉を揺れ動かし、「妙法」を体现する音声は止むことなく響きわたるといふ。そればかりか妙法を体现する音声は極楽を飛び越えて他の仏国土まで流れ出て、それを聞く者をして「深法忍」といふ境地をもたらしして仏道を歩み続けて退くことがないようにし、さらには聴覚器官を研ぎ澄ませた状態にして、恐らくは妙法を聞き取るに何の支障もないようにする、といふのである。ここでまず注目すべきは、微風がそよぐのを契機に道場樹が妙法の音源となり、その妙法には、それを聞く者をして深法忍という境地に導き、さらには仏道を着実に歩ませるといふ効力が認められるという点である。仏教語とすれば「利益」や「功德」といふ語に相当するであろうこの効力を本稿では「教化力」と表現しておきたいが、道場樹には、風を契機としてそこから発せられる音声が他の仏国土にまで流れ出てもなお有効な教化力が具わっていると読み取ることができよう。

では、極楽浄土内部における道場樹の教化力はどのようになっているのであるか。引用文②の「目にその色を觀」(傍線部)以降の動作者について、浄土宗総合研究所編『現代語訳浄土三部経』が「極楽世界の人々」と補って解している⁸。ことを是とすれば、極楽浄土に存在する者たちが眼・耳・鼻・舌・身といった感覚器官を通じて道場樹の姿・微風を契機とする枝葉の音(妙法)・花などの香り・果実などの味・輝き照らす光を感受し、あるいはその全容を心に凝らすならば、その者たちにも「深法忍」といふ境地がもたされ仏道を歩み続けて退くことがないようになり、さらには眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が研ぎ澄ませられ、六根に何らの支障も生じないといふ。道場樹は極楽に存在する者の六根を通じて教化力を發揮しているのである。願文では「知見」といふ文言になっているが、道場樹は極楽浄土の者たちの六根に感受されることで、その者たちの境地を深め仏道を歩み続けるよう導く存在となつてると読み取ることが

できよう。

ところで願文は「知見」する者、すなわち「知見」の動作者について「菩薩乃至少功德の者」と定めている。このうち「少功德の者」について註釈は「少功德者凡夫即人天衆也」と指示する。こうした解釈は以下に引用する後続の経文からも支持されよう。

③阿難、もしかの国の人天、此樹を見る者は、三法忍を得。一つには音響忍、二つには柔順忍、三つには無生法忍。

これ皆無量寿佛の威神力の故に、本願力の故、満足願の故に、明了願の故に、堅固願の故に、究竟願の故なり¹⁰。

極楽に存在する者は一様に菩薩であることは研究Ⅰにおいてすでに論じてきた。引用文③は、極楽に往生する以前に菩薩であった者はもちろんのこと、人・天であった者（下線部）でも、道場樹を見るならば「三法忍」という境地に導かれるとの説示であり、道場樹には見る者に深法忍、乃至三法忍をもたらすといった教化力が具わっていると読み取れる。そして経文自らが、その教化力の源泉が無量寿仏の「威神力」であり、種々に形容される本願の「本願力」に他ならないと宣言するのである。無量寿仏は四十八の本願成就により法蔵菩薩から無量寿仏（阿弥陀仏）となり、同時に極楽浄土が建立され、その結果、無量寿仏には威神力が生じ、本願力が生じ、極楽浄土の道場樹には極楽に存在する者たち、さらには他の仏国土の者たちに対する教化力が具わったと理解することができる。無量寿仏は極楽の道場樹に教化力を具えさせたのであり、道場樹はブツダの覚りをメモリアルに象徴するとともに、その覚りを教化力へと変換させる装置であると言えるのである。

筆者は研究Ⅰにおいて「権尾における「共生」は浄土教、就中、無量寿仏による本願成就のありさまを表現する」と指摘した。第二十八願は菩薩乃至人天が道場樹を知見することができるようにとの願意であったが、道場樹には本願力、威神力を源泉とする教化力が具わっており、その力は教化の対象があつてはじめて存在価値を得る。極楽の道場樹は極

樂に存在する者、すなわち菩薩があつてこそ存在価値を得ることができ、極樂の菩薩にとつては道場樹の存在が仏道を歩む支えとなる。そこに道場樹を介した極樂浄土と菩薩の共生の姿を読み取ることができよう。そして道場樹に具わる教化力を授かった菩薩であればこそ、第二十九願のごとく「経法を受讀し、諷誦持説して、弁才智慧を得」ることも、第三十願のごとく「智慧辯才、もし限量すべ」からざることが可能になると読み込めるのである。

三、風と音のモチーフ

道場樹に微風が徐くそよいで枝葉を動かし妙法を表す音声の流れ出る。極樂に妙法が満ちていく一つのモチーフと言える。前掲拙論にてこれを「風と音のモチーフ」と名付けたが、このモチーフは道場樹を介したものでだけでない。本経は道場樹の描写に先行する段落において、

④またその国土には、七宝の諸樹、世界に周満せり¹¹。

と言及して諸宝樹について描写し、描写し終えると、

⑤清風、時に発つて、五音の声を出す。微妙の宮商、自然に相和せり¹²。

と諸宝樹について「風と音のモチーフ」を提示する。このうち「宮商」とは、宮・商・角・徵・羽からなる五音階「五音」を略した物言いに違いなく、「自然に相和」については「五音」がおのずと和音となつて響いていると理解できよう。さて、諸宝樹における「風と音のモチーフ」を提示し終えたところで本経は道場樹の描写に移るのであるが、道場樹の描写を終えたところで再び諸宝樹における「風と音のモチーフ」についての言及を再開させている。すなわち引用文③に引き続いて、

⑥佛、阿難に告げたまわく。世間の帝王に、百千の音楽あり。轉輪聖王より乃至第六天上の伎樂の音声、展転して相

勝ること、千億万倍なり。第六天上の万種の楽の音は、無量寿国の諸もろの七宝樹の一種の音声に如かざること、千億倍なり¹³。

と説示し、諸宝樹における「風と音のモチーフ」について、俗界における「伎楽の音声」や「楽の音」と比較し、さらに続けて、

⑦また自然の万種の伎楽あり。その楽の声、法音にあらざることなし。清揚哀亮にして微妙和雅なり。十方世界の音声の中に最も第一とす¹⁴。

と示すように、極楽においても「伎楽」が演じられ、楽器を意味する「楽」からも「法音」が流れるのである。つまり、ここでの法音は楽器から奏でられる響きと同じ響きであると理解するのが妥当と言えるのである。ただし、諸宝樹に関して引用文⑤⑥⑦においては道場樹のような「教化力」についての言及はない。なお『観無量寿経』においては、極楽の風が楽器に触れることよって奏でられていると説示する¹⁵。

ところで本経における「風と音のモチーフ」はこの他にもさらに二例ほど見出すことができる。一つは上巻の締めくくりほど近い段落に、

⑧自然の徳風、徐く起って微動するに、その風調和にして、寒からず、暑からず。温涼柔軟にして、遅からず、疾からず。諸もろの羅網および衆もろの宝樹を吹いて、無量の微妙の法音を演発し、万種の温雅の徳香を流布す。その聞くことある者は、塵勞垢習、自然に起らず。風、その身に触るるに、皆、快樂を得。譬えば比丘の、滅尽三昧を得るが如し¹⁶。

とあるのがそれである。ここでは、徐く起こった徳風が諸宝樹を吹き抜け「微妙の法音」を奏で、また「徳香」を運び、それらには聞く者をして欲望・煩惱を発せさせないようにする働き、すなわち「教化力」を具えていると示されている。

そればかりか、そうした「教化力」は風そのものにも具わっており、風に触れる者は煩惱を減し尽くした修行者のような心持ちを味わうことができるという。そうした点に極楽の風が「徳風」と説示される所以があるが、そうしてみると、「微妙の法音」「徳香」に教化力が具わっているのは、そこに徳風が伴っているから、と考えるのが妥当と思われる。そこで「風と音のモチーフ」について残る最後の一例を見ておきたい。すなわち下巻に、

⑨ 無量寿仏、諸もろの声聞菩薩大衆の為に、法を班宣したまう時、(中略)歎喜し、心解し、得道せずということなし。即時に四方より、自然に風起つて、普く宝樹を吹いて、五音の声を出だし、無量の妙華を雨らして、風に随つて周徧す。自然の供養、かくのごとく絶えず¹⁷⁾。

とあるのがそれである、ここでは「風と音のモチーフ」の前段階として、極楽に風が吹き出すタイミングについて言及されている。無量寿仏の説法を聞いた菩薩等が覚りに至った時に風が自然と吹き出すというのである。こうした極楽の風について、筆者はすでに「菩薩声聞の覚りを象徴するもの」と論じている¹⁸⁾が、菩薩声聞を覚りに導いているのは無量寿仏の説法であり、そうした観点からすれば無量寿仏の説法こそ極楽に風が生み出される起点に他ならない。筆者の拙い仮説に過ぎないが、極楽の風が徳風であるのは、無量寿仏の説法に由来するからなのではなからうか。さらにこの拙い仮説を展開させるならば、極楽の風とは無量寿仏の説法が姿形を変化させたものと解釈したくなるのである。

なおここで「自然の供養」とある。「得道」した声聞菩薩に対する供養と考えていいだろう。極楽浄土に存在する者は菩薩と事実上は菩薩である声聞・人・天を除けば無量寿仏しか存在しない。説示には「自然」とあるが、供養の対象が声聞菩薩である以上、供養の主、或いは主導者は必然的に無量寿仏であると設定するしかない。ここで前の仮説を援用するならば、得道した事実上の菩薩の供養のために、無量寿仏の説法が極楽の風へと姿形を変化させ、諸宝樹を揺らし、五音からなる妙音を響かせ、妙華を降らすと考えられないだろうか。本稿では、ひとまずそのように解しておくです

る。道場樹の下に無量寿仏が鎮座して説法を施し、その周りで菩薩たちが説法を聞くのと同時に、道場樹の教化力に導かれながら得道して覺りに至ると、無量寿仏が菩薩を供養する起点となるよう説法の言説を風に変化させる。その風が道場樹や諸宝樹を揺らして法音を響かせる。極楽浄土に往生する衆生がいる限り、こうした様相が繰り返されていくのである。

無量寿仏は他国の衆生を極楽浄土に摂取し覺りへと導き続けることで極楽の様相を維持し続けることができる。他国の衆生は極楽に摂取されることで菩薩となり覺りへと導かれる。そこに極楽における無量寿仏と菩薩の共生関係を読み取ることができ、その関係を象徴する様相として「風」の存在を指摘できるのである。

四、水と音のモチーフ 〈第四十六随意聞法願をめぐる考察〉

さて前述の第四十六随意聞法願には「その志願に随って、聞かんと欲する所の法、自然に聞くことを得ん」とあるが、この願文に対応する説示として、以下の経文が目される。

⑩微瀾迴流して、転相灌注す。安詳として徐く逝きて、遅からず疾からず。波は無量自然妙声を揚ぐ。その所応に随って聞かざる者なし¹⁹。

ここではいわば「風と音のモチーフ」に対して「水と音のモチーフ」が示されるが、このうちの「所応に随って聞かざる者なし」の一節が右記願文に対応しよう。

この引用文⑩は、じつは極楽に存在する池についての描写の一部である。経文はまず極楽の池の形状、仕様とその周囲の様子について描写し、次いで菩薩および声聞による沐浴について言及してから、波から発せられる「妙声」について叙述する。したがって、この「無量自然妙声」を聞く者は明らかに極楽の菩薩・声聞（事実上の菩薩）であり、さら

に言えばその者たちに聞かせるために「妙声」は発せられていると言えよう。その「妙声」については具体的に以下のように描写される。すなわち、

⑪あるいは佛声を聞き、あるいは法声を聞き、あるいは僧声を聞き、あるいは寂靜の聲・空無我の聲・大慈悲の聲・波羅蜜の聲、あるいは十力無畏・不共法の聲・諸もろの通慧の聲・無所作の聲・不起滅の聲・無生忍の聲乃至甘露灌頂、衆もろの妙法の聲、かくのごとき等の聲、その所聞に称つて、歡喜無量なり。清淨離欲、寂滅眞實の義に隨順し、三宝・力・無所畏・不共の法に隨順し、通慧・菩薩聲聞所行の道に隨順す。三塗苦難の名あることなく、ただ自然快樂の音のみあり。この故にその国を名づけて安樂という²⁰。

とあるのがそれである。このうち、例えば「佛声」でれば「佛」を動作者や所有者と見なして「佛が発する声」「佛の声」と理解したり、あるいは「波羅蜜の聲」であれば「波羅蜜」という教理を象徴するかのように響く波音」と理解するかも知れないが、『梵本無量壽經』を参照²¹する限りにおいては、「波羅蜜の聲」に対応する paramitasabda といった複合語であれば、「波羅蜜」という音声」つまり音声として波羅蜜と響く言葉と解すことができる²²。ちなみに『現代語訳浄土三部經』において、例えば文頭の部分を、

⑫ある時は仏を「稱讚する」声に聞こえ、また仏の教え（法）を「稱讚する」声にも聞こえ、また仏の弟子たち（僧）を「稱讚する」声にも聞こえるのだ。またある時は、「煩惱を滅した」涅槃寂靜の「境地を顕す」声に聞こえ、（あらゆるものは互いに支えあつて存在しているという）空無我の「眞理を顕す」声にも聞こえ、（分け隔てなく慈しむという）大慈悲の（心を顕す）声にも聞こえ、「覺りの境地に到るという」波羅蜜の（修行を顕す）声にも聞こえるのだ²³。

と訳しているのも、そうした理解に基づくものと言えよう。「佛声」以下、ここでの「声」は総じて音声として響いてい

る言葉との解釈が可能であり、極楽の菩薩・声聞にとつて極楽の池の水面の波音は、仏、法、僧、寂靜、空無我、大慈悲等々といった仏教に関する言葉、教えの項目を表す具体的な言葉となつて聞こえてくるのである。極楽の菩薩をして「聞かんと欲する所の法、自然に聞くことを得ん」と誓つた無量寿仏の願いが成就した結果、少なくとも極楽の池においては水面の「波音」が仏教の教え、仏法の項目を示す言葉となつて「無量自然妙声」「妙法の声」を響かせると理解することができよう。そして、その結果、極楽の菩薩たちの様子はどうかであるのか、前出『現代語訳』の続きを引用して示すならば、

⑬このような「水波の」諸々の音声は、その「一人一人に」聞こえるままに響くので、「耳にした者の」喜びは計り知れない。「その声を耳にした者は」澄み切つた心の清らかさ、欲望から離れること、心の静けさという覺りの本質になじむようになり、「仏・法・僧の」三宝・「十」力・「四」無畏・「十八」不共法といった教えになじむようになり、「様々な」神通力・菩薩や声聞たちが実践する修行になじむようになる²⁴。

という。極楽の池から発せられる「名声」「妙法の声」には「覺りの本質になじむ」とあるように菩薩たちを覺りの境地に近付け、かつ「修行になじむようになる」とあるように自身の修行を促進させる「教化力」が具わっていると読み込むことができよう。また極楽については「三塗苦難の名あることなく、ただ自然快樂の音のみあり」と説示されるが、その「快樂の音」には極楽に存在する者たちに対する「教化力」が満ちており、その結果、「この故にその国を名づけて安樂という」との定義付けがなされるに至るのである。

なお『梵文無量寿経』における対応箇所において「安樂」は *sudhavaṇi* に相当し、これについては「極樂」と訳される場合がある²⁵。ちなみに『梵文無量寿経』では前出漢訳に相応する箇所が続いてさらに、

⑭〈幸あるところ〉という世界の幸福の諸原因をたたえ述べている間に一劫もの（時間）が終わりになったとしても、

おな、それらの幸せの諸原因の際限を知ることとはできないのである。

と説示される²⁶。梵文²⁷から和訳されたこの一節は漢訳における「無量自然妙声」の「無量」に対応する内容を含んでい
ると思われるが、この「幸あるところ」という世界」は *sukhavatī* の訳語であり、傍線部「幸福（幸せ）の諸原因」
は *sukhakarāṇa* の訳語となっている。この *sukhakarāṇa* を「たえ述べる」とは、具体的には、漢訳「佛声」「法
声」「僧声」あるいは「波羅蜜の声」などに対応する、*buddhasabda*、*dharmaśabda*、*saṃghasabda*、*paramitaśabda* とい
った、前分に仏教の教え、仏法の項目を示す言葉を配し、後分に音声の意味する *śabda* を配した複合語を列挙するこ
とに相当し、*sukhakarāṇa* について言えば、それが *buddhasabda* 等々の複合語によって表現される音声であることが知
られるのである。そして、そのような *sukhakarāṇa* を列挙するに際限のない世界こそ *sukhavatī* に他ならないとい
うのが、『梵文無量寿経』における極楽に関する一つの定義付けと読み取れるのである。なお『阿弥陀経』においては
sukhavatī が「極楽」と訳され、その定義付けが示されていることは周知のとおりである²⁸。

ともあれ、極楽浄土における第四十六願成就の様相の一つとして、極楽の池の水面を音源とする「水と音のモチーフ」
を指摘することができよう。その音は極楽浄土の菩薩たちが聞きたいと欲する教えを表す言葉であると同時に菩薩たち
に対する「教化力」（利益、功德）を具えた音声として菩薩たちの耳に「快樂な音」として届き、そのような音声に満た
された世界であるからこそ無量寿仏の仏国土が *sukhavatī* と称されるのである。菩薩にとつての無量寿仏の仏国土、す
なわち浄土は菩薩自身へと向けられる「教化力」溢れる「音」に満たされていけばこそ「極楽」たり得ていると言え
う。

五、「風と音」「水と音」に共通するリズム

筆者は冒頭に紹介した拙論「極楽の風をめぐる考察」において、「風と音」「水と音」のモチーフにおいて共通するリズムがあることを指摘した。そのリズムを引用文⑧と⑩における「遅からず、疾からず」（下線部）から読み取ったのである。その際、そもそもそのリズムは極楽の風に具わっているのであり、「水と音のモチーフ」の基盤となる池の水面における波立ちの「遅からず、疾からず」については、同じく「遅からず、疾からず」の風のリズムに影響されてのことと解釈した。

そのような極楽の風について本稿では、前に「極楽の風が徳風であるのは、無量寿仏の説法に由来するからなのではないだろうか。さらに言えば、極楽の風とは無量寿仏の説法が姿形を展開させたものと解釈したくなる」との拙い仮説を示した。

「水と音のモチーフ」においては、極楽の池の水面の波から発せられる音について、仏法の項目を具体的な言葉として語る音声として描かれている。本経自身が極楽の池の波音が仏法の条目を表す言葉として響く根拠を示すことはないが、前掲拙論において筆者は、水波が生じる一因として極楽の風の存在を予想することは当然と指摘している。水波が生ずる一因に風を挙げることができれば、風に関する仮説を引き継ぎつつ、その風が発生するところの起因である無量寿仏の説法が波音に再現され仏法の項目を示す言葉となったと読み込んでおきたいのである。そのためには、風が「遅からず、疾からず」であるのは、無量寿仏の説法がそのようなスピードであるからとの解釈が是認される必要がある。ただし「遅からず、疾からず」や無量寿仏の説法のスピードについて註釈が多くを語ることはない。とはいえ波音に教化力が具わっていることは明白であり、道場樹に関する考察において「道場樹には本願力、威神力を源泉とする教化力が具わっており、その力は教化の対象があつてはじめて存在価値を得る。極楽の道場樹は極楽に存在する者、すなわち菩薩があつてこそ存在価値を得ることができ、極楽の菩薩にとつては道場樹の存在が仏道を歩む支えとなる。そこ

に道場樹を介した極楽浄土と菩薩の共生の姿を読み取ることができよう」と指摘したが、極楽の池の波音と菩薩についても同様の関係を指摘することができよう。

なお「風と音のモチーフ」において引用文のように音楽が仏法を表す言葉にはならないパターンがあるのは、そこに無量寿仏の説法が響いているからと見ることはできないだろうか。ともあれ、その点については、今は問題提起にとどめておきたい。

六、結びにかえて

浄土宗の開祖、法然上人の教えを伝える著作『登山状』に「我らが往生は仏の正覚により、仏の正覚は我らが往生による。若くは不生者の誓いこれをもて知り、不取正覚のこと限りあるをや。」²⁹との一節があり、「私たちの往生が叶うのは阿彌陀さまが覚られたからであり、阿彌陀さまが覚られたのは、私たちの往生を叶えて下さるからなのです。《もし往生できなければ》という一節はこのように理解せねばならず、「決して仏とはならない」と誓われたお言葉に、いかなる限定があるのでしょうか。（いや、あろうはずありません。）³⁰との現代語訳が付されている。これは無量寿仏（阿彌陀仏）の四十八願中、第十八念仏往生願を取り上げながら無量寿仏と私たちの関係を示したものである。

⑮設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不取正覺唯除五逆誹謗正法³¹
と示される念仏往生願において、無量寿仏は十方世界の衆生に対し、わずか十遍の「南無阿彌陀仏」すなわち十念を称えたならば極楽往生を叶えるようお願い、その成就を自らの成仏にあたり必要不可欠な条件として誓っている。私たち衆生の立場からすれば、私たちの念仏往生は無量寿仏が誓願を成就して覚りに達したからこそ叶うのであるが、無量寿仏の立場からすれば、自身が覚りに達し仏となるためには私たちの往生が必要不可欠なのである。ここに無量寿仏と私たち

の「共生」関係を見出すことができるが、こうした関係が成り立つのは、無量寿仏が「不取正覚」と宣言した誓約があるからに他ならない。じつは四十八願の願文には一々に「不取正覚」という一言が添えられており、願いが叶わないようなことがあるれば「決して仏とはならない」との決意、すなわち誓約を述べる形式を採る。四十八の誓願一々がすべて成就しない限り、無量寿仏は成仏できないのである。その誓願内容に他者の存在が含まれれば、誓願を介した他者との関係を構築しなければ無量寿仏の成仏は叶わない。もちろん本経は、無量寿仏は今現に成仏し、四十八願は成就しているとの立場を採るのであるから、誓願を介した他者との関係はすでに構築されていると見るべきである。

本稿は、四十八願中、國中菩薩に関する誓願に注目し、そのなかでも第二十八見道場樹願と第四十六随意聞法願を取り上げ、考察を加えた。その結果、

1. 極楽の道場樹には「教化力」が具わっており、その教化力は無量寿仏が四十八願を成就したことによって生じている。
2. 他仏国土への衆生においては道場樹から発せられる音声聞くことで、極楽の菩薩においては道場樹を六根各々、またはすべてを用いて感受することで道場樹の教化力が発揮される。
3. 道場樹が音源となり、そこから音声が発せられるには風が必要である。
4. 同じく風によって極楽の諸宝樹から発せられる音声や香りにも「教化力」が具わっている。
5. 極楽の風は菩薩が無量寿仏の説法を聞き覚りに達した時点で吹き出すことから、風の起点は無量寿仏の説法にあると考えられる。
6. 極楽の池の水面の波音が菩薩には仏法の項目を表す言葉になって聞こえるという説示において、第四十六随意聞法願成就の様相を知ることができるが、水流の「遅からず疾かたず」というリズムに着目するならば、波音を発

生させる一因として風の存在を指摘することができる。

7. 極楽の池の波音にも教化力が具わっている。

8. 無量寿仏の説法を起点とする風であればこそ、極楽の池の波音に教化力が具わり、かつ波音について仏法の項目を表す言葉に展開させることが可能との仮説を立てることができる。

といった、以上の知見を得ることができた。

極楽浄土における無量寿仏と極楽の菩薩との共生関係については、覚りへと導く教化者と覚りへと導かれる教化対象という一見、一方通行の関係でありながら、無量寿仏は菩薩に対する教化力の発揮なくしては仏たり得ず、菩薩は無量寿仏を起点とする教化力に導かれることなくして覚りの境地、仏を目指すことができないう双方方向の関係を有しているという点を指摘できよう。そして両者の共生は、無量寿仏の説法を起点とする風によって展開される極楽の様相のなか、音声を中心とした描写において具体的に理解されるのである。以上を指摘し擱筆としたい。

注

1. 「極楽浄土における諸相と共生に関する研究Ⅰ、—本経における極楽に存在する者—」（東海学園大学共生文化研究所「共生文化研究」創刊号、二〇一六）、「極楽浄土における諸相と共生に関する研究Ⅱ —諸仏世界との共生の可能性—」（前掲書第二号、二〇一六）

2. 『浄土宗聖典』第一巻、浄土宗、二二八、二二九、二三一、二三二頁

3. 義山『無量寿経随聞講録』は諸仏供養願・供具如意願成就を示す一連の経文中、供養の品を諸仏に捧げる「奉散諸仏」の一語について、「奉散諸佛等者他方諸佛等也奉散者大般若第四百廿七卷有散華品大論第十卷有十方菩薩來集佛所散華求聽妙法」（『浄土宗全書』第一四卷、四二二頁下）と述べ、極楽の菩薩が他仏国土の仏に供養の品を捧げるのは、「妙法を聴くことを求むる」との大論の

文言を以て指摘する。

4. 義山『無量壽経随聞講録』(『浄土宗全書』第一四卷)、三三五頁下―三三六頁上
5. 浄土宗総合研究所編訳『現代語訳浄土三部経』、浄土宗、二〇一一、五四頁
6. 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二四一頁
7. 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二四一頁
8. 浄土宗総合研究所編訳『現代語訳浄土三部経』、浄土宗、二〇一一、七五頁
9. 義山『無量壽経随聞講録』(『浄土宗全書』第一四卷)、三三七頁上
10. 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二四一頁
11. 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二三九頁
12. 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二四〇頁
13. 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二四一、二四二頁
14. 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二四二頁
15. 第二観に「八種の清風、光明より出でて、この楽器を鼓(なら)して、苦・空・無常・無我の音(こゑ)を演説せしむ」(『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二九四頁)とある。
16. 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二四六頁
17. 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二五七頁
18. 「極楽の風をめぐる考察」(平等院『鳳翔学叢』一三、二〇一七)
19. 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二四三頁
20. 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二四三頁
21. 香川孝雄『無量壽経の諸本対照研究』、永田昌文堂、一九八四、二二二頁
22. 辻直四郎『サンスクリット文法』、岩波書店、一九九一、二二九頁
23. 浄土宗総合研究所編訳『現代語訳浄土三部経』、浄土宗、二〇一一、七九頁
24. 浄土宗総合研究所編訳『現代語訳浄土三部経』、浄土宗、二〇一一、八〇頁

- 25 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』、永田昌文堂、一九八四、二二四―二二五頁
- 26 中村元・早島鏡正・紀野一義訳注『浄土三部経(上)』、岩波書店、一九九一、七二頁
- 27 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』、永田昌文堂、一九八四、二二二頁
- 28 袖山榮輝『全訳全注阿弥陀經事典』、鈴木出版、二〇〇八、二六―二七頁
- 29 『浄土宗聖典』第四卷、浄土宗、五一―頁
- 30 浄土宗総合研究所編訳『法然上人のご法語』a法語編、浄土宗、一九九九、一一六頁
- 31 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二八頁

キーワード

無量壽經 第二十八見道場樹願 第四十六隨意聞法願 極楽の風 極楽の池

(そでやま えいき 浄土宗総合研究所 主任研究員)